

「人形は、
人と自然の架け橋だと、
私は思っています」

Information

高島屋美術部創設110年記念
古稀記念 京人形司十四世面庄
面屋庄甫の世界
— 伝統を踏まえて —

京都店 6階美術画廊
2018年1月24日(水) → 30日(火)
日本橋店 6階美術画廊
2月14日(水) → 20日(火)
※最終日は午後4時閉場

めんや・しょうほ 1947年、京人形司十三世面庄三の三男として京都に生まれる。1965年、京展初入選。1993年、京都美術文化賞受賞など受賞歴多数。展覧会多数。



上：「時空」(約22.5×18.0×高さ37.0cm)、下：「シンフォニー」(約21.5×20.0×高さ21.0cm)



面屋庄甫
Shoho Menya

十四世京人形司 雅と幽玄の世界

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura

江

戸時代から続く京人形司面庄の十四世 面屋庄甫氏。20代から彫刻家としても高い評価を受け、30歳の頃から彫刻的フォルムと人形の素材が融合した作品を作り始めた。そして現在は、桐材で原型を作り、何度も胡粉を塗って仕上げる京人形の伝統に即しながら、御所人形、雛人形などの伝統的なものと、現代的な人形を制作している。「すべての作品の根底に流れているのは、26歳の時に友人と旅したインドでの経験」と話す。

「寄ってくる蚊を追い払いほしても決して殺さない、持っているものがごくわずかでも、それを人に分け与える、と考えるインドの人から、生き物はすべて同等だという自然観や人と人はどうつながらなくてはいけないかを教わった」
今回展示される御所人形「祈りの舞」は、インドで知り合った写真家の展覧会をきっかけに知った、天竜川沿いの村に伝わる祭りがモチーフ。20年以上ライフワークとして作り続けている。

「自然の神様をお呼びして、もてなし、一体になる、という本来の祭りなんです。僕が探し求めている、日本人の精神性がそこにある」

また近年作り始めた自然の事物と子どもがコラボレーションする作品も展開される。
「年が行ったせいなんです。負けたくないとか、ちょっとでも目立ちたいという気持ちがないって、自分が思っていることを素直に形にしたらそれでええのん

と違うかな、と思えてきましたね。かぶらを見てたら田園の風景が浮かんできまして、田園というたらベートーヴェンかな、と単純に考えながら作っています(笑)」

ユニークな発想と作品全体から漂う愛らしさに心が温まる。「人形は、顔つき、全体の雰囲気作家がそのまま出ます。僕の場合はギャップがあるみたいですけどね」と笑ったが、風貌は別にして内面は、作品にくっきりと反映されている気がした。



「祈りの舞 昇龍」(約30.0×25.0×高さ31.0cm)